



長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東京医大卒業後、大阪第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

昨秋、『生きる』というミュージカルを観ました。黒澤明監督のあの名作を、監督没後20年を記念し、宮本亜門さんが初の舞台化。映画で志村喬さんが演じた主役は、鹿賀丈史さんと市村正親さんのWキャストという、それはそれは豪華な布陣でした。私は、市村さんの回を観たのですが中盤からもう、涙が止まりませんでした。

主人公の渡辺は、市役所職員。人の前に出ることなく、事なかれ主義を慎ましく生きてきた役人らしい(?)役人でしたが、ある日、胃がんで余命半年だと告げられます。そこで初めて、生きる意味を自問自答し、残りわずかの人生で成すべきことを見つけて、仕事への向き合い方を変えるのです。

私は、余命宣告という言葉が

俳優 石田信之



石田さんは、6月13日に川崎市内の病院で亡くなりました。死因は、大腸がんからの多臓器

嫌いです。だけどこの舞台を観たときに、余命宣告を受けて輝ける人生もあるのだと改めて考えました。

そして、特撮ドラマ『ミラーマン』などで知られる俳優の石田信之さんの訃報を聞き、再び、余命について考えています。

転移。68歳でした。2014年1月にステージ4の大腸がんと診断。3月に手術をしたところ、肝臓への転移のほか、胃がんの併存も発見されました。つまり、転移ではない別のがんもあったということ。これを重複がんといいます。同年5月に、この胃がんと肝臓の転移巣を手術で切除。その後は抗がん剤治療を続けていきましたが、2015年の夏に今度は尿管に再発を認め、医師から「余命30カ月」と言われたそうです。

医師は通常、余命30カ月などと宣告したりはしません。おそらく石田さんから迫ったのでしよう。

誤解している人も多いのですが、余命とは、その人に残された時間を伝えるものではないかもしれません。その人と同じがん、同じステージだった人全体の生存期間の中央値です。中

央値とは、簡単に言えば、その集団の50%が亡くなるまでの期間のことで、平均値とも微妙に異なります。しかし、がんの病態は、100人いれば100人とも違う。

だから、統計学的な予測値よりも長生きする人もいれば、あっという間に旅立つ人もいます。

石田さんの場合も、先の余命宣告よりもずっと長く生きられましたね。『生きる』の主人公のように、残りの時間を意識することによって、より充実した人生の最終章を送られたのかもしれない。

最後にブログを更新したのは4月6日のこと。お孫さんの小学校入学の報告です。「お孫君のランドセル姿…見たいと思って頑張ってきました」と綴っています。

余命宣告をバネにして、生きる力に変えていく…ミラーマンはやはり、最期まで強い人でした。

「余命宣告」を生きる力に